



# PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

## かいは桶の中で

しばらくの間、私の疑い深い頭の中で、ひねくれた考えがぐるぐると回っていました。「どうしてもわからないわ。歌詞に「かいは桶の中で、赤ちゃん用のベットもなく」とあるのは知っている。でも、聖母マリア様に赤ちゃんのイエス様のちゃんとしたベツドがないからどうした、というこの論争は何なの？ 彼女がイエス様をかいは桶と呼ばれる物に入れた事はさておいて、私には何より、どうしてマリア様が子どもをなにかに入れたのが理解できないわ。」

私の家では、赤ちゃん用ベッドは使いません。子育ての間、私達は自然なやり方を取りました。助産婦についてもらい自宅で出産したのです。私の出産の経験は割と原始的でした。今日

の時代でも、部族の女性達はこの方法で出産します。病院での講習等はありません。私はすぐ子どもに母乳を与え、赤ちゃんは私といっしょに寝るのです。

だから私は疑問に思うのです。近代的方法より何世紀も昔の部族の文化に生まれたマリア様は、当然こういう昔の女性達のやり方を知っていたはずで

す。彼女は、他の親戚の女性達皆がそれまでに出産したのと同じ様に、聖なる子どもを産み、そして彼女の胸に抱きしめたはずなのです。それなら何故しばしば映画の中でヨゼフは、イエス様が産まれるとすぐにマリア様から離し、儀式ばって、かいは桶の中に入れる、と描かれるのでしょうか？

私も一度自分の子どもをかいは桶に入れた事があります。私達の二番目の子どもが産まれてまだ四日目に、彼女を「借り」て

もいいのか、と頼まれたのです。地元のカトリック農業共同体が、彼女にイエス様になつてもらい、クリスマスイヴの深夜ミサの間、かいは桶の中に居て欲しい、と言つのです。とても素敵なアイデアだと思いましたが。私は赤ちゃんに何枚も服を着せました。暖かい場所だと彼等は保証してくれました。

彼等は彼女を干し草に置き、沢山の人が彼女を囲みました。私は誇らしく思うべきだったのでしよう。けれど、彼女はとても小さく、ひとりぼっちに見えませんでした。ミサは永遠に続くように思えました。段々私は心配になり、彼女を連れ戻さずにはいられなくなり、ました。その後、車の中で、彼女の誕生の感激と、彼女を「分け合う」事を考え、泣いたのを覚えています。

後になって私は、聖書の中に、「このかいは桶の謎の鍵を探しました。聖書がイエス様の実際の誕生の事柄について、少ししか触れていないのは、興味深い事実です。ルカの福音書から、マリア様が男の子を産み、彼を布でくるみ、かいは桶に入れた(ルカの福音書2章7-8節)という事はわかっていきます。それがすべてです。

多分聖書ではその一番個人的な瞬間を、新しく出来た家族への、プライベートな、時間を越えたプレゼントとして、抜かしているのでしょうか。多分その曖昧さは、実は赤ちゃんはそんなにすぐ母親から引き離されなかったという事かもしれません。(映画製作者達に何がわかっていて、と言つのでしょうか?)もしかしたら神はその無限の愛とお慈悲で、この聖なる家族に時間を神聖な時間を、彼等の小さな子どもへの喜びをかみしめる為の下さったのかもしれない。私はマリア様が、赤

# エリザベス

## クリスマスの贈り物

ちゃんが満足するまで胸に抱いてミルクをあげたのだと思つたのです。そしてイエス様を抱いていっしょに眠つたと想像するのです。約束された時間が来るまでは。

そしてマリア様は彼を分け合つたのです。彼女は自分から進んで分け合つたのです。

赤ちゃんのイエス様は、産まれた最初の夜にお母さんから離されたのです。何故なら彼はマリア様のものではなかつたから。彼は私のものだから。そしてあなたの。

私は自分の産まれて四日目の子どもを数分でも分け合う事は出来ませんでした。しかし、マリア様は自ら進んで、生まれて間もない自分の息子を、私達一人一人に、永久に分け合おうと差し出したのです。

マリア・ヘンリー

クリスマスイブに生まれる予定の二人目の子どもを心待ちにするのは楽しい事でした。何というクリスマスへの贈り物なのでしょう。しかし、エリザベスが生まれるや否や、私は恐怖感に胸を突き刺される思いがしました。何か具合がおかしいことが分かりました。私がすぐさま思ったことは、「彼女の頭がとても小さく、とても変形しているようだ」という事でした。

座っていることも、自分で食事を摂ることも決してできないでしょう。」と彼は言いました。

「色もよくありません。

泣き方も変で、誰かが触れるたびにびくつとするのです。目が見えているのか、音が聞こえているのかわかりません。」と彼は冷静に言いました。彼が下した結論はエリザベスの障害はサイトメガロウイルスによるものであって、そのウイルスはこのような障害を引き起こすこととはまれにしかないということでした。「私の人生は終わつたわ。」と私は思いました。私は聖書に書かれてある約束(たとえば神が全てを癒してくれることとか、万物が善い方へ向かうものであるとかいうこと)が本当たと信じているキ

リスト教徒でありながらも私は混乱してしまいました。私は神様に今すぐ彼女を治してくれるようにお願いしましたが、神様は治してはくれませんでした。だから、私は神様に私を打ち殺してくれるようにお願いしました。私にはこのような苦しんでいる子どもを育てる事ができなかったのです。私は聖書の知識から、エリザベスが生まれてきたことは祝福すべきことであることは知っていました。私は幸せどころでなく、打ちのめされていたのです。

「たい」と彼は言いました。「神様、私もエリザベスを愛せるように力を貸して下さい。」と私は祈りました。

私達が病院で過ごした時間は悪夢のようなものでした。私はエリザベスの担当の医者に会うことを恐れました。彼にとつてエリザベスは悲劇でした。しかし、彼女の世話をしてくれている看護婦はみんな前向きで親切でした。「エリザベスは頭を撫でられるのが好きなのよ。」とか「彼女はよくミルクを飲むのよ。」とかよく言ってくれました。エリザベスは看護婦のみんなにとつては希望のない未来ではなく、愛するに値する小さな少女だったので。この女性達が私の心に、娘に対する愛情の種を植えてくれた最初の人達だったので。

新生児の専門医が私の部屋に来て診療結果を告げた時、彼はぶっきらぼうでほとんど残酷とも言える口振りでした。「あなたのお嬢さんはひどい小頭症です。脳はいたるところがひどく損傷しています。もし生きることができて

も寝返りを打つことも、

夫のジムがエリザベスに對して持つていた愛情が、彼の悲しみより上回つていたのでした。彼が彼女を見る様子をじっと見てみると、彼の目に表れる優しさで彼の思いやりがわかりました。「私は彼女が生まれしてきたこの残酷な世界から、彼女を守つてやり

エリザベスと一緒に退院する前に小児科の医者は、「神様はエリザベスを

育てるようあなたを選ばれたのです。」と言いました。彼が、このことは希望のない、無意味な悲劇ではないということを示唆したのです。神様は、彼女が私の子宮の中に宿る前から彼女を知っておられたのだから、私は医者言うことが正しいと思いましたが、どのような結果になる

とも、神様はエリザベスが胎内に宿る前から愛し、彼女が私達の家族の一員になるということを知っておられたのでした。

私達は12月22日の金曜日の朝、エリザベスを家に連れて帰りました。エリザベスはもはや瀕死の状態ではありませんでしたが、これから彼女に何が起

るか私の恐怖は心から離れませんでした。しかし私はそれをがんばって切り抜けないければなりません。クリスマス準備もしなければなりません

でした。もっともクリスマスは私が望んでいた通りにはならなかったのです

が、最初は、エリザベスを見るたびに私の心は痛みました。彼女の将来のことしか私には見えませんでした。それはまるで目の前にいる彼女よりも、彼女の未来の方がより人間的であるかのようにでした。この彼女の未来の姿は情け容赦なく私を苦しめる生きもののようにでした。私は今まで通りに考え行動し、エリザベスを（実際はそうであつたのですが）かわいい女の子として見る事ができないように思えました。

エリザベスが生まれてからの数ヶ月間、私にできることはエリザベスを揺すってやり、聖書を読むことだけのよう思われま

した。神の言葉だけが希望と安らぎをもたらしてくれるものでした。

エリザベスを揺すりながら私はまた、言葉では言い表わしようのない苦しみに耐えた他の人々の悲しい言葉に耳を傾け、エリザベスと二人きりでよく涙を流したものでした。やがて、神が私の心を癒してくれ始めました。長女のシャクリーンは嫌がったのですが、エリザベスは抱っこされるのが好きで

した。エリザベスが私の腕に抱かれて、じっと満足しているのを見ると、私は嬉しくなりました。それから彼女は、私の目をじっと見つめ始めたのでした。私達の心はつながったのです。（後になつてわかったことですが、彼女は耳も聞こえていたのです。）

私のエリザベスに対する愛情が深まっていったにもかかわらず、私は、彼女ができない色々なことを考えていつも悲しみに浸っていました。彼女は頭を持ち上げることも、座っ

ていることも、おもちゃで遊ぶことも、声を出すことも、何もかもできませんでした。彼女にできるのは、につこり笑うことでした。そしてありがたいことに、彼女はよく笑ったのです。

エリザベスは、生後八ヶ月の時、ひどい苦しみを伴った情け容赦のない筋肉のけいれんを起こしました。その時、私の長い憂鬱な状態に転機が訪れました。私は小児科の病院に電話をしました。多分発作を起こしているのです、すぐ救急室へ連れてくるようにと言われました。私は祈りました。「神様、私はこれ以上問題を負うことはできません。あなたはどこにいらっしやるのですか。」と。

私はエリザベスが病院の診察台の上で苦痛にあえぐのを見守りながら、心から神様の私達に対する愛を疑いました。どうして神様は彼女にこのような

ことに耐えさせることができるのでしょうか。どうしてこのことが私達の家族のためになるのでしょうか。救急の担当医はエリザベスがひきつけを起こしているとは考えず、抗生物質が効くと信じ、抗生物質を与えて、彼女を家に返しました。しかし彼女の容態はよくなりませんでした。

その日の午後、私は神を崇め、神に感謝をすることの力についての本を読みました。そこで私は、たとえばエリザベスの目が見え、耳が聞こえるというように、自分が思いつくすべてについて神に感謝し始めました。私のエリザベスに対する苦悩は癒されな

かったけれども、神を讃えることで私は神の安らぎの近くにいて絶望から遠ざかっていることができました。その次の日、私はエリザベスをかかりつけの小児科医のところへ連

れて行きました。彼はすぐ、彼女が単なる胃腸炎を起こしていると診断しました。彼が処方した薬はすぐに彼女の苦痛を和らげ始めました。

エリザベスが胃腸炎の発作から回復し、再び元の彼女の明るい姿になった時、私は心から喜びました。初めて、私はエリザベ

スの発育の遅れで悲しみの気持ちでいっぱいにならない日を数日間続けて楽しむことができました。私は、彼女の気分がよくなり、もう一度笑うことができようになるようになったことをただ感謝したのでした。その時から私は、心を良いことに集中させようと心がけました。

エリザベスの胃腸炎の発作と彼女の初めての誕生日との間、私は、エリザベスについてですてきなことに感謝してより多くの時間を過ごしました。彼女はすぐに笑いしましたが、

なかなか不平は言いませんでした。とてもたくさんのことが彼女を喜ばせました。たとえば顔にあたる

風や、姉と一緒に入浴、家族の人から受けるキスや食べさせてもらうアイスクリームなどです。彼女はくすぐられたり、宙に振り回されたりすると、とてもよく笑いました。

エリザベスが最初の誕生日(彼女の二度目のクリスマス)の直前の日ですが、が来るまでにお祝いすることが私達にはたくさんありました。一つには、エリザベスが生き続けられたということでした。また、彼女にはいろいろとできなことがありました。が、彼女はジムと私が今までに会ったことがないような幸せな人でした。彼女を見る時、私達の目には彼女の異常さは映りませんでした。私達に見えたのは彼女の純粋な快活な心でした。私達は彼女がい

ない家族の幸せを想像することができません。エリザベスの治療担当医は私にエリザベスの発達の程度(悲しいことに、彼は二ヶ月だと言ったのですが)のことで落胆しないように、そしてエリザベスの成長のみに目を向けるように言いました。彼女の腕は堅さが少しとれ、明るい色のおもちゃを目で追う事ができました。このようなことは些細なことのように思えますが、彼女の脳の状態を考えれば、そうではなかったのです。私達には、その年のクリスマスをお祝いしようとする理由がありました。それは、私が祈り続けていたエリザベスに対する無条件の愛を神様が与えてくれたということなんです。なんと、というクリスマスプレゼントでしょう。

エリザベスが誕生日のプレゼントで遊ぶことができないう事実に対

する悲しみと闘いつつも、私は平常心でいられるようになって始めていました。それでも私は奇跡を祈っていました。

エリザベスの四回目の誕生日のあと、私は彼女と私達の四年間の成長を振り返って、私の家族に宛てて次のようなクリスマスレターを書きました。

### 私の家族と 友達の皆様へ

今年のエリザベスの誕生日パーティーとクリスマスの準備をしていてとても楽しく過ごせました。

朝、私がクリスマスプレゼントを包んでいる間、エリザベスが私と一緒にいられるように、私は彼女をベビーカーに乗せました。彼女の微笑んでいる満足そうな顔をじっと見て四年前彼女が生まれた事を楽しく思い出しながら、私

は感謝の気持ちでいっぱいになりました。突然私は呆然となりました。私は彼女の誕生をそれが幸せな思い出であるかのように追体験していたのです。私は彼女の暗い将来のことを思っただけで、恐ろしかったかではなく、彼女を抱いてどんなに彼女がかわいいか、と気づいた時の事だけを考えていたのでした。私は、神様が私の途方も無い苦悩の刺を取り去ってくださり、その代わりに幸せな時を大いに増してくれただけがわかって、私の心が弾みました。今年、私はエリザベスの誕生日パーティーのテーマをバレーにしようと決めました。私達は、彼女を新しいダンス衣装に包みました。エリザベスがとても疲れて、彼女の治療用の歩行器で立っていただけなく、ジムは、彼女を抱えあげ、ぐるぐると彼女を宙に回しました。彼女はぐ

るぐる回る部屋や、顔に当たる風や、かわいいクリスマス飾りの電球や、特に彼女の眼下の微笑む父親の顔を見て喜んでくすくす笑いました。エリザベスの衣装は、ドレスの上の部分に黄色で、下の部分がピンク、それに白のスニーカーと、組合せが変だったけれど、私は「今夜はエリザベスが世界中で一番美しいバレリーナだわ。」と思いながら微笑みました。私はいつも奇跡を祈り続けるつもりですが、エリザベスは今のままで十分にすばらしい贈りものなのです。

みなさんへ、

メリークリスマス

ライザ・サンダース

## メリーと心が触れあつた瞬間

「メリーは一言も話さなかった。でも彼女の言いたいことは私の胸にしみ通つていった。」

誰もが一度は会うことがあるのではないでしょう。私達の心の目を開いてくれるような特別な人に。私達に大切な何かを与え、心に何かを湧き起こしてくれる、そんな人々が世の中にはいるものです。かつては赤ん坊を空中高く抱き上げたその手は、今は関節炎のため自由に動かなくなつたけれども、私達の話にうなずき、一生懸命聞いてくれる人達。彼らの無言の理解が静かに私達の生活にしみ入ってきました。こんないつでも神様のような心を持った人達が、どうして今、たくさん物

るために自分達のできることをしようと努めます。彼らはとても控えめなもので、特に運がいいということでもなければ、私達は大抵彼らの周りを触れあいがなくただ歩いてまわるだけです。その日は運が良かったのでしよう。その幸運に感謝しています。

彼女はまだそこに存在している、というだけで、私に何かを教えてくださいました。彼女は一言も話さなかったけれど、彼女の言いたいことは、私の胸にしみ通つていきました。誰かが彼女の名前はメリーだと教えてくれました。メリー。そしてこれが私と彼女が唯一共通に持っているものでした。私の名前もメリーだったので。最初は

初、私は彼女の部屋の方を早く盗み見ただけで特に関心を払いませんでした。私はおばちゃんに会いにきただけなからと自分に言いかけました。おばちゃんというのには、私が幼い頃から大好きだったおばを呼んできた呼称で、私がどんなにおばちゃん子だったかがわかると思う。おばちゃんはその頃、その療養所にいたので、しばしばおばを訪ねていたもので、私は他の患者さんとも親しくなり、あちこちのベッドや車椅子の側に立ち止まったり、おしゃべりしたり、楽しく過ごしていました。でも私はメリーのことには避けていました。なぜなら、メリーは私が親しくなつた患者さんとは違い、ただ胎児のように丸まった姿勢でベットにじつと横たわり、お祈りをして

る時のように組み合わさつた手の上に顔をのせて動かずにいるのが常だったからです。看護婦さん達は、メリーによく尽くしていました。私は、彼女たちが交替でメリーの部屋に行き、寝返りをうつせたり、お風呂に入れたり、食事をさせたり、着替えをさせたりしているのを見るときも、最低限快適に過ごせるように必要なことは全て行われていました。ただ一つのことを除いて。でもこれが私がつたことの理由ではありませんでした。私は尊敬されるべきことは何もしていませんでした。ただ私は何となく興味を持って、好奇心に負けてメリーの部屋に

行っただけなのです。親切心からではありませんでした。義務感でもありませんでした。キリスト教の愛の教えに導かれたからでもあります。私をそこに行かせたものは好奇心に過ぎなかった。でも老人の扱い方に関する教えを、永久に変えることになったのです。

私はそつとメリーの部屋に入りました。ドアの側に見つめていました。きれいな顔立ちというわけでもないわね、と私は思いました。若い頃はきれいだったこともあったのかしら。



そこで私はその部屋にメリーの若い頃の写真など一つもないことに気付きました。その他、お気に入りキルトとか結婚式の写真とか赤ん坊の写真とか、一般に患者の家族が壁に貼りそうなものは何一つありませんでした。こう言っただけを見てるといつも心に思い浮かぶ事がありました。誰だつて生きるか死ぬかという時、寝たきりになって誰かの手で食事をする運命になる可能性がある、という事でした。その部屋のがらんとしたあまりの飾りけのなさに、私はメリーから目を難す事ができませんでした。

髪の毛が少なくなっているの、どこから頭皮でどこから顔がよくわかりませんでした。幾筋かの髪が何とか髪の形を保とうと必死にへばりついていました。彼女の半分透きとおったような、しわの刻まれた肌を返って際立

たせて見せるのみでした。私は彼女は盲目で、その上おそろく耳も聴こえないだろうと知っていました。看護婦さん達は、彼女は一言もしゃべった事がないと言っていました。生まれる前の姿勢に今また戻ったかのように丸まって、彼女はただじつと横たわっていました。生まれくるというよりはむしろ今この世を去っていくかのように見えました。

メリーは眠っているかのように見えました。私が部屋に入って行った時、びくりとも動きませんでした。椅子を引き寄せ、ベッドのすぐ側まで近寄って座りました。私は彼女から目を離すことができませんでした。そうやって彼女を見つめて座ったまま、私の心にこんな思いが浮かんできました。「彼女にとっ

ことなんだろう。」するとすぐその答が浮かんできました。自分の考えがあまりにも醜いものだったの、私は自分が恥ずかしくなりました。カトリックの家庭で厳しくしつけられた事から、少しばかりの正義感が良心的な答を考え出してしまいました。罪悪と良心とが闘い始めましたが、どちらも消え去ろうとせず、決着がつきそうにもありませんでした。心の中の葛藤が目立って激しくなり、私は身もだえし、汗がふきでてきました。

すると突然彼女が動きました。彼女の手が私の方に差し出され、私に触れました。おそろおそろ彼女の指は私を探り、確かめ、なで始めました。そして突然、まるで子どものように、彼女は私をぎゅっと握りしめ、できる限りの力で私を近くに引き寄せようとした。まるで私を抱こうとするかのように

た。そのうち彼女は体を少し起こし、突如リラックスして満足したようでした。彼女はやっと体を引き難しました。でもまだ私の手を探せる位置にとどまっていた。私の両手を取ると、彼女は自分の顔に引き寄せました。ほほの向きをかわるがわる変えて、私の指にキスし、触れるように顔を動かしました。彼女の口は乾いていましたが、ほほはぬれていました。メリーは泣いていました。あるいは私がそう思っただけなのかもしれません。でも彼女は音一つ立ててはいませんでした。私の手は彼女の涙と私の涙とでぬれていました。やがて彼女は私の手を離しました。そして私から離れながら、そつと元の位置へと戻り、また前のように横たわって、胎児の姿勢に戻りました。

私達の中には、世界中のメリーのような人々を医

寮費の原価償却をするだけの植物人間だと言う人たちがいいます。生命の本質的な価値を世俗的にお金に換算する人達です。とんでもない御都合主義の決まりきったせりふ（彼のためだ）、彼女が自分で決める事ができたらきつとこうしたに違いない」は、死を告げる鐘のようなものです。一度聞いたら、患者の周りの人みんなの頭から決して去らなくなるのです。メリーは植物なんかではありませんでした。

記：メリー・アリス・

アルトファー

## 「命の福音」より

『わたしのほかに神はない

わたしは殺し、また生かす』

(申命記 32・39)

### 安楽死の悲劇

人生の終局にあつて、人間は死の神秘に向き合います。今日、医学上の進歩の結果、また超越的なものに門戸を開かず文化的状況が深まりつつある中で、

死の経験は新しい様相を帯びています。快樂と幸福をもたらずか否かという尺度で、いのちの価値を判断するのが趨勢となつていきます。そこでは、苦しみは耐えがたい妨げであり、何としてでもそこから抜け出るべきものにとらえられていくようです。新しい経験、興味深い経験を有する未来へと続くはずのいのちが突然さえぎられる

と、死は無意味なものと見なされます。ひとたびいのちがもはや意味のないものとされると、あるのは苦痛ばかりで、いや応なしにさらに大きな苦しみを味わわなければならぬので、死は「正当な解放」となるのです。

さらに、人間が神との根本的なかかわりを否定し軽視するとき、人間は自身自身が規則であり尺度であると考えるに至ります。つまり、十全にして完全な自律性のうちに、自分のいのちをどう扱うかを決めるのは自分なのだから、そのための方法と手段を社会は自分に保証すべきであるとする権利を要求するのである。このように考え

るのは、とくに先進諸国の人々です。医学が着実に進歩しており、さらに医療上の技術が日進月歩の発展を遂げていることから、彼らはそうしたほうがよいと促されていると感じるのです。高度に洗練されたシステムと設備を駆使すること、今日、科学と医療活動は、以前には処置不能と見なされた症例を扱ったり、痛みを緩和したり除去できるようになつたばかりでなく、さらには極度に衰弱した状態にあるいのちでも保持し延命させたり、基本的な生物学上の機能が突然危機的な状態になつてもその患者を人工的に蘇生させたり、さまざまな器官を移植に利用できる特別な操作を活用できるまでになりました。

このような流れの中で、安楽死を頼みにしたいという誘惑が強まっています。つまり、死をコント

ロールし、自分のいのちあるいは他人のいのちを「徐々に」終わらせて、本来迎えるべき時に先立つて死をもたらそうという誘惑が強まりつつあるのです。これは論理的で人道的であるように見えますが、より厳密に検討すると、現実には無分別で非人道的な所業であることが分かります。ここでわたしたちは、「死の文化」のいつそう驚くべき兆候の一つに直面します。極端なまでの効率至上主義に特徴づけられ繁栄する社会において、とりわけ力を増しつつある「死の文化」、数を増す一方の高齢者と障害のある人をがまんのできない存在であり重荷と見る「死の文化」が、勢力を伸ばしています。こうして高齢者や障害のある人は、自分の家族や社会から見捨てられる場合が少なくありません。そのようなときの家族や社会は、ひたす

ら生産効率という基準のみに基づく組織となっており、その基準によれば回復の見込みのないのちは、もはや何の価値もないとされるのです。

カトリック中央協議会

発行

12月

## PRO LIFE HERO

今月のプロ・ライフ・ヒーローは、神奈川県大和市にお住いの長渕治雄様です。

上智大学のデーケン神父さまが主催されている「生と死を考える会」の大和市の代表をしておられる長渕さんはプロ・ライフ・ニュースも二十部引き受けてくれています。これらのことは、布教のつもり、宣教活動のつもりでやっていますと言われませんでした。

仕事上、座りっぱなしが多いと言われる長渕さんは一人一人を尋ねてニュースを配ることは出来ないのです。教会、病院、薬局等にまとめて置いてくれているそうです。月があらたまって行っただけと、ニュースがたくさん

残っている時もあるけれど、新しいニュースと置き換えて次の月に行っただけだと、今度は無くなったり…と色々だそうです。病院などでは、待っている間に暇だから読んでくれるようですよとおっしゃっていました。

「ホスピスのルーツを訪ねて」というツアーをくんで、九月に十五人ほどつれ、パリとロンドンとダブリンを訪ねてきたのですが、いかに人間を大事にしているか日本とずいぶん違っていたので、参加者はみんなびっくりして帰ってきました。人間を大事にするということは、つまり、人間の命を大事にするということなのですが、中絶はその命を命と認めていなく、日本の病院の在り方、テクニクやひどいときには、この頃、耳にすることですが、胎児を物として扱っていることです。そういうことを私はその都

度その都度、機会があれば、口に出して、述べているのですとおっしゃってられます。

そのように述べて下さったお陰でも高槻市の渡辺厚美さん(プロ・ライフ・ニュースの64号のPRO LIFE HEROで紹介した方)のようにプロ・ライフ活動に協力して下さる方が増えてくることは有難いことです。

長渕さんは、これからも生命尊重運動の最初である胎児の命の尊さを述べ続けてくれることと事務所では期待しています。

12月 大岡滋子